

報道関係機関と地球研との懇談会

2015年 3月12日(木) 14:00~15:00

京都烏丸コンベンションホール 会議室4

〒604-8162 京都市中京区烏丸通六角下る七観音町634

TEL. 075-231-6351

1 開会挨拶

あべけんいち

阿部健一 研究高度化支援センター教授

地球環境問題の最近の動向について

第7回世界水フォーラム

2015年4月12日(日)~17日(金) in 韓国

京都で第3回世界水フォーラムが開催されたのは2003年。3年に一度の本フォーラムは、水問題に関する最大の国際会議です。その後メキシコ、トルコ、フランス、と多様なステークホルダーの参加を得てさらに規模を大きくしてきました。第7回のフォーラムは4月にお隣韓国で開催されます。今回、地球研は世界の研究機関として唯一、16あるテーマのひとつ、Water and Culture, Justice, Ethicを担当することになりました。このテーマのもと、7つのセッションと日韓こども交流ワークショップ、日韓市民ネットワーク会議を企画しています。

2 講演会・セミナーなどのお知らせ

あべけんいち

説明：阿部健一 研究高度化支援センター教授

地球研ステークホルダー・プレゼンテーション大会： 地球環境問題を解決するイノベーション

2015年3月14日(土) 13:00~17:30

総合地球環境学研究所 講演室

地球環境問題のステークホルダー(利害関係者・当事者)は、地球に暮らす私たちです。今回のプレゼンテーション大会では、基調講演者/評価員に、俳優として活動しながら環境や社会を見つめ直し、未来における生活を新たなビジネスモデルと共に創造していく株式会社「リバープロジェクト」の代表を務める伊勢谷友介氏を迎え、ステークホルダー間の意見交換・合意形成を行います。

RIHN-CEReS 連携構築ワークショップ

2015年3月27日(金) 13:30~17:00

総合地球環境学研究所 セミナー室3・4

2015年2月20日に千葉大学環境リモートセンシング研究センター(CEReS)と学术交流に関する包括協定を締結したことを機に、本ワークショップを開催します。両機関の研究資源と研究課題を相互に理解することを通じて、将来的な共同研究のシーズを発掘します。



インドにおける「家畜糞」の有効活用

えんどう ひとし
遠藤 仁 「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクト研究員

どの混和材、染色への利用、宗教的儀式への使用など様々な用途に有効に利用されています。

その中でも燃料としての利用は、半乾燥地で薪炭材として圧迫されている森林資源へのストレスを軽減させる有効なものですが、一方で、薪よりも有害物質を多く排出するなどの問題点も指摘されています。家畜糞の利用が我々の社会に与える影響を紹介し、その利用の未来可能性について考えたいと思います。



インド北西部で用いられている家畜糞燃料「牛糞ケーキ」



ニシンはどこへ消えた？—小魚で繋がる地域地球環境学

はまだしんご
濱田 信吾 「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性—歴史生態学からのアプローチ」
プロジェクト研究員

ニシンは、大型魚や海獣、海鳥など多くの動物のエサとなっており、北太平洋、北大西洋生態系における重要な生物です。人間にとっても重要で、日本国内のニシン漁業は、明治時代には年間100万トン近く漁獲される一大漁業でした。昭和期に入ってからニシンの産卵回遊は途絶しますが、乱獲なのか海洋環境変動なのか原因はまだはっきりとわかっていません。近年は漁獲量が回復しつつあるように見えますが、歴史的視点から見ると、その回復は微量です。

こうした状況の中、現在、ニシンの多くは魚肥や缶詰生産ではなく、数の子生産のために行われています。そして、日本で消費される数の子の多くはアラスカからの輸入に頼るようになっています。一方、ニシン卵は現地の先住民にとっても重要な食糧源で、これまで魚卵だけを収穫して親魚を獲らないという、自らの文化と社会に基づいた資源管理を実践してきました。

ニシンは商品として北太平洋の東と西を繋げることになりましたが、その結果はどうなるでしょうか。商品としてだけでなく、ニシンに関する歴史と知識を繋げることによって、生産と消費、そして浪費から限りあるニシン資源と海洋環境の未来可能性について考えてみます。



数の子の収穫



流域委員会という場づくりを通じて地域の未来を「共に創る」

かとうひさあき
加藤久明

「統合的水資源管理のための「水土の知」を設える」

プロジェクト研究推進支援員

地球研では、「水土の知」プロジェクトを通じた統合的水資源管理の地域レベルからの見直しを、そこに住む人々と協働しながら試みています。今回は、その事例地域のひとつである、インドネシア・バリ島北部にあるサバ川流域における流域委員会の共創に関する試みについて報告いたします。

バリ島は、千年以上の強固な水利組合制度である「スバック」を有し、多くの人々を魅了してきましたが、近年では若者の農業離れ、河川に捨てられるゴミ問題、水田のホテルや宅地への土地転用などの問題を抱えています。特に、土地転用は複雑な水と人の繋がりを大きく変えてしまっていますが、伝統的なスバックの仕組みはこの変化を止める術を持っていません。このような流域を取り巻く状況の中で、科学者である私たちは答えを与えるのではなく、共に問題を考え、解決の方法を導くための場として流域委員会の組織づくりを、対話を重ねながら試みています。



サバ川中流の水田において進む宅地開発（道路を造り、その左右に住宅が建てられます）



「歴史はおもしろい！」をたくさんの人と共有するために —歴史学研究者が今取り組むべきこと—

かまたに

鎌谷かおる

「高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索」

プロジェクト研究員

私はこれまで江戸時代の琵琶湖岸の人々の生活について研究をしてきました。江戸時代の研究は、「古文書」を読み解き、過去を復元していく作業です。研究を進めていくうちに、江戸時代の地域の暮らしがどのように変化しながら「今」につながっているのかということに興味を持ちました。10年前からは、湖岸の地域に仲間とともに研究所を設置し、地域の人々から今の暮らしや慣習について教えてもらいながら、「地域とともに学ぶ」というスタイルの研究を続けています。また、多くの人に「歴史を知る楽しさ」を知ってもらうために、各地で古文書講座を開催しています。

歴史学は、目に見えて何かに役立つという学問ではありませんが、過去を知ることで今の自分を知ることができる「心の豊かさ」につながる学問だと思っています。普通に暮らす日常が連続と続き今につながるのであれば、江戸時代の「普通の日々」は確実に今につながっています。過去から何を学び、何が今につながり、何を未来につなげるのか。一人でも多くの人にそのことを考えるきっかけを作ることが、歴史学研究者の役割のひとつだと考えています。



調査先のみなさんと古文書を見る作業

4 出版物その他

会場にてご用意いたします。

懇談会についてのお問い合わせ



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature

総務課企画室企画広報係 いずもり 泉森

TEL: 075-707-2115 (直通)

FAX: 075-707-2106

E-mail: kikaku@chikyu.ac.jp